

第 116 回・日商簿記検定試験 3 級 第 1 問 仕訳問題類題

次の各取引について仕訳しなさい。ただし、勘定科目は次の中から最も適切と思われるものを選ぶこと。

現金	現金過不足	当座預金	受取手形
売掛金	未収金	前払金	建物
売買目的有価証券	支払手形	買掛金	仮受金
貸倒引当金	前受金	未払金	売上
受取家賃	雑益	固定資産売却益	有価証券売却益
貸倒損失	有価証券売却損	雑損	貸倒引当金繰入
消耗品費	交通費	減価償却費	支払手数料

1. 小笠原商店へ商品 400,000 円を売り渡し、代金のうち 250,000 円については、かねて当店が村上商店を受取人、諏訪商店を名宛人として振り出した為替手形を裏書譲渡され、残額については月末に受け取ることにした。なお、小笠原商店負担の発送運賃 8,000 円については、小切手を振り出して立替払いした。
2. 営業用の建物を 5,000,000 円で購入し、代金は当月末に支払うこととした。なお、仲介手数料 100,000 円については、小切手を振り出して支払った。
3. 前月末に得意先より 300,000 円が当座預金口座に振り込まれたが、その内容が不明であったため仮受金として処理していたが、本日得意先から連絡が入り、その内訳が売掛金の回収額 200,000 円と、注文を受けた商品 400,000 円に対する内金 100,000 円であることが判明した。
4. 前期に生じた売掛金 300,000 円が得意先の倒産により回収できなくなったため、貸倒として処理する。なお、貸倒引当金の残高は 250,000 円である。
5. 当期中に売買目的で取得した直江工業株式会社の株式 10,000 株（1 株当たり購入単価 500 円、その他に購入時に証券会社へ支払った手数料は総額で 30,000 円）のうち、5,000 株を 1 株につき 502 円で売却し、代金は月末に受け取ることにした。

・解答

	仕訳			
	借方科目	金額	貸方科目	金額
1	受取手形	250,000	売上	400,000
	売掛金	158,000	当座預金	8,000
2	建物	5,100,000	未払金	5,000,000
			当座預金	100,000
3	仮受金	300,000	売掛金	200,000
			前受金	100,000
4	貸倒引当金	250,000	売掛金	300,000
	貸倒損失	50,000		
5	未収金	2,510,000	売買目的有価証券	2,515,000
	有価証券売却損	5,000		

・解説

1. 売上取引に関する問題です。このような問題は【為替手形に関する取引】【掛け売上に関する取引】【発送運賃に関する取引】の3つに分けて考えると、難易度がぐっと下がって分かりやすくなります。

・為替手形に関する取引

問題文に「代金のうち 250,000 円については、かねて当店が村上商店を受取人、諏訪商店を名宛人として振り出した為替手形を裏書譲渡され」とありますので、以前に当店が振り出した為替手形を受け取ったことが分かります。

結論から言いますと受取手形勘定で処理することになるのですが、支払手形勘定を使ってしまった方もいると思いますので、ここで【当店が為替手形を振り出したときの仕訳】を考えてみましょう（仕入に伴って為替手形を振り出したと仮定します）

☆参考・為替手形を振り出したときの当店の仕訳

（借）仕入 250,000 / （貸）売掛金 250,000

☆参考・為替手形を振り出したときの村上商店の仕訳

（借）受取手形 250,000 / （貸）売上 250,000

☆参考・為替手形を振り出したときの諏訪商店の仕訳

(借) 買掛金 250,000 / (貸) 支払手形 250,000

上記のポイントは、当店の仕訳で「支払手形勘定を使って処理していない点」です。よって、今回の仕訳で支払手形を減少させるのはおかしいことがお分かりいただけると思います。過去に自ら振り出した為替手形であっても、手形代金については名宛人（本問では諏訪商店）から取り立てることになるため、裏書譲渡された場合は受取手形の増加として処理することになります。

★解答①

(借) 受取手形 250,000 / (貸) 売上 250,000

・ 掛け売上に関する取引

これは簡単です。普通に掛売上をした時の仕訳を切るだけです。

★解答②

(借) 売掛金 150,000 / (貸) 売上 150,000

・ 発送運賃に関する取引

問題文の「**小切手を振り出して立替払いした**」から、当該発送運賃が先方負担であることが分かりますが、この場合の処理方法は以下の2つが考えられます。

- ・ 売上債権である売掛金勘定に含めて処理する方法
- ・ 立替金勘定を使って売上債権である売掛金とは別にして処理する方法

どちらによるかは必ず問題文に指示がありますので見落とさないようにしてください。稀に問題文に指示がない場合もありますが、その場合は許容勘定群や解答用紙などにヒントが隠れているので、慌てずに落ち着いて対処するようにしてください。

本問は、問題文で与えられている勘定科目の中に「立替金」勘定がありませんので、**売掛金勘定に含めて処理する方法**により仕訳を切ることになります。

★解答③

(借) 売掛金 8,000 / (貸) 当座預金 8,000

なお、仮に発送運賃が当店負担の場合は、発送費などの勘定科目を使って費用処理することになりますので、併せてそちらのほうも押さえておいてください。

以上、①②③の仕訳を合算すると解答になります。本問はやや難易度の高い問題ですので、間違えてしまった方も多いと思いますが、ひとつひとつに分解して考えれば十分正解にたどりつける問題です。

2. 固定資産の購入に関する問題です。この問題のポイントはズバリ「購入原価＝購入代価＋付随費用」ということが分かっているかどうかです。

建物だけに限らず、備品や車両などの固定資産を購入した際に、**不可避免的に発生した費用（付随費用）は取得原価に含めて計算すること**になりますので、仲介手数料 100,000 円を取得原価に含めることを忘れないように注意してください。

ここで仮に・・・建物の購入に際して、購入代金を第三者から借り入れたとします。その際に手数料を支払うケースなんかもあるかと思いますが、これは取得原価には含めません。理由は「建物の購入に当たり不可避免的に発生した費用」ではないからです。当該手数料は財務費用（支払手数料勘定など）として費用計上されていくことになります。

付随費用の原価算入に関するポイントは「**固定資産の購入に当たり不可避免的に発生したかどうか**」という点です。これは「固定資産の購入と直接関係のある費用かどうか」と言い換えることも出来ます。直接関係あれば取得原価に含めて資産計上することになりますし、直接関係のないものであれば、別建てで費用計上することになります。

なお、商品売買取引以外で発生した債務（本問では 5,000,000 円）については、未払金勘定を使って処理することになりますので、買掛金勘定を使わないように注意してください。

- ・商品売買取引に伴い発生した債権・債務→売掛金・買掛金
- ・商品売買取引以外で発生した債権・債務→未収金・未払金

有形固定資産の購入に関する問題は、第 100 回の間 5や第 101 回の間 4、第 106 回の間 1、第 109 回の間 3、第 113 回の間 3、第 118 回の間 2、第 123 回の間 3でも出題されていますので、併せて確

認しておいてください。同じような形式で繰り返し出題されていることがお分かりいただけると思います。

3. 仮受金・前受金に関する問題です。仮受金とは、入金の実事があるものの相手勘定や入金された理由などが不明な場合に、一時的に計上する勘定科目を言います。

本問は、問題文に「得意先より 300,000 円が当座預金口座に振り込まれたが、その内容が不明であったため仮受金として処理していた」とありますので、以前に以下のような仕訳を切っていたことが分かります。

☆既に切られている仕訳

(借) 当座預金 300,000 / (貸) 仮受金 300,000

そして今回の調査の結果、「その内訳が売掛金の回収額 200,000 円と、注文を受けた商品 400,000 円に対する内金 100,000 円」であることが判明しましたので、200,000 円の仮受金を売掛金と相殺し、100,000 円の仮受金を前受金に振り替える仕訳を切ることになります。

★200,000 円の仮受金を売掛金と相殺する仕訳

(借) 仮受金 200,000 / (貸) 売掛金 200,000

★100,000 円の仮受金を前受金に振り替える仕訳

(借) 仮受金 100,000 / (貸) 前受金 100,000

■仮受金と前受金の違いについて

- ・仮受金・・・何のためのお金か分からないまま（とりあえず仮に）受け取った場合に計上する勘定
- ・前受金・・・何のためのお金か分かっている（取引の前に）受け取った場合に計上する勘定

仮受金と前受金についてはきちんと区別できるようにしておいてください。目的がはっきりしていない場合は仮受金で、目的がはっきりしている場合は前受金と考えることも出来ます。

仮受金と前受金に関する問題は、第 101 回の間 1や第 109 回の間 5、第 112 回の間 3などでも出題されていますので、併せて確認しておいてください。

4. 債権の貸倒れに関する問題です。売掛金の貸倒れに関する問題は、当該売掛金の発生時期によって仕訳が異なりますので、まず貸倒れた債権がいつ発生したのかを確認するようにしてください。発生

時期と引当金計上の有無で3つのパターンに分けることができます。

- ①前期以前発生・当期貸倒れ（引当金計上済み）
- ②前期以前発生・当期貸倒れ（引当金未計上）
- ③当期発生・当期貸倒れ

本問は問題文に「前期に生じた売掛金 300,000 円が得意先の倒産により回収できなくなった」「貸倒引当金の残高は 250,000 円である」とありますので①のケースに該当することになります。

よって、貸倒れた売掛金のうち 250,000 円については引当金を取り崩して充当し、残りの 50,000 円については貸倒損失を計上することになります。

では、せっかくですから、②と③のケースの仕訳も考えてみましょう。②は前期以前に発生した債権について貸倒引当金を計上していないケースです。この場合、貸倒引当金を取り崩すことは出来ませんので、**全額、貸倒損失として計上することになります。**

（借）貸倒損失 300,000 / （貸）売掛金 300,000

③は当期発生の債権が貸倒れたケースですが、これについても**全額、当期の費用である貸倒損失として計上することになります。**なお、当期発生の債権に関しては引当金が設定されていることは考えられませんが、引当金が設定されているかいないかで場合わけする必要はありません。

（借）貸倒損失 300,000 / （貸）売掛金 300,000

債権の貸倒れに関する問題は、第 101 回の問 2や第 109 回の問 1、第 120 回の問 5でも出題されていますので、併せて確認しておいてください。いずれも簡単なレベルの問題です。

5. 有価証券の売却に関する問題です。本問は、有価証券購入時に手数料が発生していますので、単価を使って計算する場合は忘れないように考慮してください。

☆直江工業株式会社の株式 10,000 株を購入したときの仕訳

（借）売買目的有価証券 5,030,000 / （貸）現金など 5,030,000

有価証券の売却損益は、有価証券の帳簿価額と売却価額との差額により算定しますので、機械的に

金額を当てはめていってください。慣れるまでは以下のように1つ1つ段階を追って考えていくほうが分かりやすいと思います。

- ・有価証券の帳簿価額 = $5,030,000 \text{ 円} \times 1/2 = 2,515,000 \text{ 円}$
- ・有価証券の売却価額 = $@502 \text{ 円} \times 5,000 \text{ 株} = 2,510,000 \text{ 円}$
- ・差額 = $5,000 \text{ 円}$ (帳簿価額 > 売却価額・・・売却損)

慣れてきたら、電卓だけで解答の仕訳を導き出せるようにしておくといいでしょう。僕が実際に解く際に電卓に打ち込んだキー順序を載せておきますので、まずは同じような手順で練習してみてください。

5,000

×

502

M+ → (借方に (借) 未収金 2,510,000 と書く)

10,000

×

500

+

30,000

÷

2

M- → (貸方に (貸) 売買目的有価証券 2,515,000 と書く)

RM → (借方に (借) 有価証券売却損 5,000 と書く)

なお、本問のように商品売買取引以外で発生した債権・債務については、未収金・未払金勘定を使って処理することになりますので、売掛金勘定や買掛金勘定を使わないように注意してください。

- ・商品売買取引に伴い発生した債権・債務 → 売掛金・買掛金
- ・商品売買取引以外で発生した債権・債務 → 未収金・未払金

有価証券の売却に関する問題は、第102回の間5や第110回の間1、第118回の間1、第123回の間4でも出題されていますので、併せて確認しておいてください。